

年間第33主日

福音朗読 マタイ 25・14-30

2023.11.19 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、有名なタラントンのたとえ話でした。タラントンというのは大きなお金の単位だというふうに言われていて、このたとえ話の中でタラントンが、わたしたちが神様から色々にいただいているものを表わしているというふうにずうっと解釈されます。その中で才能とか、そういうふうにより今日の共同祈願の中にも出てきますけども、しかし忘れてはならないのは、福音書の中でわたしたちが神様からいただく最も大切なものは十字架である、ということです。それぞれの人生の中で救いに至る、でもその十字架をイエス様を通して受け取っていくように招かれるわけです。それは色々な形での人生上の困難や苦勞、苦しみです。

それをそのまま、ただただ自分が苦しむためだけに起こっていることっていうふうに受け取っているだけでは十字架とはなりません。それは単なる苦しみや苦勞。しかし、それを通して救いに至る恵みの入口なんだというふうに受け取るならば、その人生上の苦難や苦しみが十字架になり、そして復活へと導いてくれる入口になると言うことです。

ところで、今日は「貧しい人のための世界祈願日」にあたっています。カトリック教会にとって、「貧しい人のための世界祈願日」というのは、フランシスコ教皇様が制定された祈願日の一つですけれども、毎年教皇様はこの日のためにメッセージをお出しになります。[ことしのメッセージ](#)のテーマは、「どんな貧しい人にも顔をそむけてはならない」という言葉ですが、これは旧約聖書の中に出て来るトビト記という物語から採られた言葉です（トビト4・7）。

トビト記の登場人物であるトビトという人物は、神様の前に正しい人であり、他の人を助ける、そういう人なわけですが——詳しくはそれぞれのおうちでトビト記を読んでいただきたいわけですが——そのトビトは、他の人を助ける愛の業を行うがために苦勞が降りかかって来る。そして、時には王様から全財産を没収されたり、そして時には視力を失ったりっていう、それは他の人を助けた結果なわけなんですけども、そのことによってトビトは、「他の人のことにかかわりあうことは全く無意味だ。自分の生活を守っていく」というふうな気持ちに変わらずに、むしろ、「自分自身が貧しくされることを通して、他の人の苦難により一層寄り添うことができる、目が開

かれた」っていうふうに、教皇様はメッセージの中でこの物語を解説してくれているわけなんです。自分自身が苦しみを負う者になったときに、他者の苦しみがより良く分かる。そうして、息子のトビアに対して、遺言のような形で、「あなたがこれから生きていく人生の旅において、どんな貧しい人にも顔をそむけてはならない」という、今までの苦労を通してトビト自身が学んだことのメッセージとして言っている。それが今年の「貧しい人のための世界祈願日」のテーマとしてフランシスコ教皇様は選ばれているわけです。

トビトは苦労が身に降りかかって来ることを通して、より他の人の苦労に対して心が開かれていき、信仰が強くなされた。しかし、多くの場合は、みんなが同じ経験をして、同じ様になっていくとは限らないということです。むしろ、苦労すればするほど、自分のことだけに、自分のことを守っていかなければならないというふうに、関心が自分のほうに向いてしまうということのほうが、わたしたちの経験の中では多いのかもしれない。

それが、主人から預かったタラントンを増やす人あるいは地の中に隠しておく人の違いと言ってもいいかもしれません。経験を通して、それがより広いことに気づきを与えてくれるか、それともただ自分が目の前で経験している、今感じていることそのもの、ただただ苦労をするためだけにこの出来事が起こっているということの中に留めておくのか、という違いです。福音書のたとえ話では増やす人の方が多かった。三人出てきて、二人は増やす、一人は隠しておく。でも、実際は割合は逆かもしれません。でも、わたしたちは信仰を通して、「あなたはどちらですか？」と問いかけられていると言ってもいいと思います。

最後に、このたとえ話の中では、「それだったら銀行に預けておけば良かったのに」っていう、たとえ話の中の主人が言います。当時「銀行」という制度があったかどうか分かりませんが、それに近いものとして「銀行」というふうに翻訳されているわけですが、それは言い直せば、「あなたがどうしていいか分からなければ、^{ほか}他の人に助けてもらえば良かったのに」っていうことです。助けていただく第一番目の人は——人と言っていいかどうか——それは聖霊です。聖霊を通して、その苦難の中で、その与えられていることの意味を明らかにしていただく。そして、教会です。教皇様のメッセージなどに触れることを通して自分の考え方を広げていく（聞く耳を持つならば、の話です）。

そのようにして、わたしたちが日々体験している、とりわけ苦難とか苦しみをほんとの意味での十字架に変えて行くというのは、信仰に支えられたわたしたちの受け取り方によるのではないかと思います。そのようにしたときに、「憐れみ深い者は幸い

である。その人は憐れみを受ける」(マタイ 5・7) という聖書の言葉が実現する。それは、神様が相手によって報酬を変えるということではなくて、自分自身が開かれようとするときに、わたしたちの心の目も開かれて、神様が備えてくださっている多くの助けや恵みに気付くことができる。自分の中だけに目が向いているならば、神様が備えてくれているものに気付くことができず、神様はただ要求するだけ、っていうふうに見えてしまって、自分自身で恵みへの道を閉ざしてしまう。そういうことになりはしないか、ということなのではないかと思います。

わたしたちが、今日特に「貧しい人のための世界祈願日」という、それはわたしたち自身にとっても恵みに、神様に近づいて行くための道であるということを心に留めながら、今、一人ひとりが人生の経験の中で体験した多くの苦勞を手掛かりとして他の人を思い遣る、その目が開かれて、お互い同士助ける思いで、今特に助けを必要としている人々のために祈り、また行動することができるように導きを願いながら、このごミサを通してお互いのために神様の恵みを願いたいと思います。

参照：2023年 第7回「貧しい人のための世界祈願日」教皇メッセージ
<https://www.cbcj.catholic.jp/2023/11/12/28225/>

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>